
まほこん

夢乃良

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

まほこん

【Nコード】

N5516E

【作者名】

夢乃良

【あらすじ】

現代を生きるサトミと未来から来たチャチャ。まほこんって何なのか。

落ちていたまぼこん

「ナニコレ？」

道端でサトミが拾い上げたのは木の棒に数字の書かれたボタンがついている奇妙な物体。

木製のような風体でなければ『リモコン』でも通じそうな、それでいてやけに長い棒。教師がよく使う指示棒くらいの長さである。

「拾うには怪しさ爆発ね」

棒を元あった場所にばいと投げ捨て、サトミは家路を急いだ。

彼女の立ち去った後にその棒が淡い光を発しているのに気付くことはなかった。

「夏休みの宿題って津波よねー」

『そうそう……。どばーんって来て最悪ー』

ケラケラ笑いながらサトミはクラスメイトとの電話に夢中だ。最中になん度が母親が風呂に入れとか長話はそこまでしておけとか、言いに来てはいるがまるつきり無視である。

「そつえば聞いた？」

『何がー？』

「休み明けのテストに色鉛筆って話」

『まーじーでー？最悪ー。アレって色塗った結果でシンソウシンリ見るんでしょー？』

「そう言う噂だけどねー」

『子供の遊びで犯罪者予備軍とか言われたら最悪よねー』

電話の向こうできゃっきゃつと笑う声。凶悪犯罪を防ぐためと称して、定期的に行われる適性検査。心理テストの一環である。

彼女たちが笑えるのも黒と言われていないからだ。

「まあ、大丈夫でしょ。その後も大掃除もカンベンだしね」

『ガッコの周りまでだもんねー。午後休みなんだから早く帰りたい

よね』

人生を謳歌している時代の彼女たちの話題は尽きることなく。夜遅くにどちらかが眠たくなるまで続く。

「じゃそろそろ寝るねー」

『アタシも寝るわー。おやすみー』

「おやすみー」

Pi!とケータイの通話終了ボタンを押して。「お風呂はいろつと」とベッドの上にケータイをぽすんと投げて。

電気が消された空っぽの部屋に淡い輝きを纏った物が宙に浮かんでいたが、無論見る者もなくしばらく浮かんでいた物体はベッドと壁の隙間に落ちてしまった。

当然そのようなことを知らないサトミはいつものようにベッドにもぐりこみ、すぐに眠りに落ちてしまった。

ぼすん。

ベッドの隅に重量が乗った。ベットがまた元の形に戻ろうと揺れる。

「こら…チャチャ…乗っちゃダメって言ってるでしょ…」

「はわわーっ」

「はわわ…?」

寝ぼけ眼で身体を起こしたサトミが見たのは、ペットの『チャチャ』ではなく、人の形をした影で。

「あ、あのっ、怪しいとかそんなんではなくですね…」

「…」

「ちよつと落とし物探してるとかですね。あ。ワタクシ『チャチャ』についています。って、自己紹介してる場合ではなくてですねっ」

「ど…」

「ど?どで始まる単語とは無縁というかですねっ」

「どろぼっ?」

「はわわーっ。違うですよ違うのですー」

影がバタバタと何か身振りをする。無論暗がりでは何をしているかはサトミに通じるわけもなく。

「チャチャ？」

「奇遇にも同じ名前の方がいるとは感激…じゃなくてですねっ」

サトミは手探りで部屋の明かりのリモコンを探す。ベッドサイドにいつも置いてあるので難なく発見し、スイッチを入れる。

「はわっ!？」

ベッドの隅にいた影は人間の形をしていた。何処かの民族衣装だろうか。不思議な光を反射するようで色が七色に変わるような。

「やっぱリドロボウ…?」

「はわわー! ワタクシ捜し物にきたのですー。怪しそうでも怪しくないのですー」

「怪しいじゃん。夜中に人ん家に不法侵入よね」

「時間軸がずれてしまったというかですねっ、難しい話はワタクシも判らないのですー」

「捜し物って言うてたけど」

「そうなのですー。『まほこん』がこの辺にあるはずなのですー」

「『まほこん』?」

「見つけないとテスト不合格ですー」

「不合格じゃダメなの?」

「ダメなのですー。『まほこん』がなければ生活が難しいのですー」
チャチャと名乗る少女は身振り手振りで『まほこん』という物体

の説明を開始した。

長さ、形状など。昼間にサトミが見つけた謎の木の棒と合致する
のではあるが、興味がなかった彼女が覚えているわけもなく。

「それで何が出来るの?」

少しサトミにも興味が出てきた。

「ついてるボタンを組み合わせる魔法を使っですよー。最新科学の
粋が詰まった結晶ですー」

「科学で魔法?」

「ありがとうございますー」

「じゃそういうことで。」

「はい？」

「帰るんでしょう？」

「かえるですよーお邪魔したのですー」

チャチャが棒についているボタンをぴ、ぴ、ぽ。と押して一振り。

「…。」

「…。」

何も起こらない。

「あれね？」

幾度となく押してはみるが何も起こらない。

「はれれー!？」

これがサトミにとっての受難となるのは明白であった。

落ちていたまぼこん（後書き）

某サイトでお題が提示されていましてだったので使用したお題を掲載。

- ・ 津波
- ・ 色鉛筆
- ・ 民族衣装

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5516e/>

まほこん

2011年2月4日03時10分発行